

第 38 回日本エンドメトリオーシス学会

DS-2

東京,2017.1.20-22

卵巣チョコレート嚢胞合併不妊に対する高度生殖補助医療（ART）の適応

中岡義晴

IVF なんばクリニック

子宮内膜症は月経を有する女性に生じる進行性の良性疾患であり、月経痛などの疼痛と妊孕能低下を主とした臨床症状を呈する。近年の女性の社会進出や核家族化など女性を取り巻く社会環境の変化により、晩婚化や晩産化が進み、子宮内膜症の発生頻度の上昇と症状の重症化を招いている。

子宮内膜症患者は 30-50%が不妊になるとされ、子宮内膜症の無い患者と比較して妊孕能は 1/2-1/3 に低下し、重症患者が無治療の場合 2-3 年間の累積妊娠率は 5-10%にすぎないとされている。

不妊を主訴として受診した患者の初診時の問診、内診および超音波検査から、卵巣チョコレート嚢胞の診断は容易である。1cm 以上の卵巣チョコレート嚢胞があれば、R-ASRM 分類の Stage3 以上（中等度）の子宮内膜症に分類される。卵巣チョコレート嚢胞を合併した不妊治療には、子宮内膜症以外の不妊原因の有無と女性年齢が重要となる。

女性の加齢は卵巣内の卵子数(卵巣予備能)を減少させ、染色体異常をはじめとした卵子の質を低下させる。高度生殖補助医療（ART）の成績は卵子の質と関連し、女性年齢 35 歳を境に妊娠率の低下と流産率の上昇による生産率の低下が顕著になる。日本産科婦人科学会の発表した ART 成績によると、移植当たりの妊娠率は 35 歳で 37%だが、38 歳、40 歳でそれぞれ 32%、25%に低下している。

卵巣チョコレート嚢胞に対する核出手術は非 ART による妊娠率向上につながる一方、正常卵巣組織の切除などによる卵巣予備能低下が生じ、特に両側性の場合には早期卵巣不全を引き起こす可能性もある。高齢女性は術後の妊娠率が低く、妊娠可能な貴重な期間を無駄に費やさないうえにも手術は勧められない。また、一般に人工授精での累積妊娠率は 5 周期以降に上昇が少ないことから、4 回で妊娠に至らない場合には ART を勧める。

子宮内膜症合併の ART 成績は、卵子の質の低下、採卵卵子数の減少、子宮内膜着床環境の悪影響などにより、他の不妊因子と比較して低いとする報告がある一方で、卵子数、受精卵数の減少はあるが、良好胚率や妊娠率、流産率には差が無いとする報告も多い。卵巣チョコレート嚢胞に対しては、卵巣血流改善や卵巣刺激による卵子数増加を期待し、ART 治療前に穿刺内容吸引やアルコール固定が行われている。

当院では、不妊治療開始から通常 1 年を目安として妊娠成立を目指している。女性年齢

が 35 歳未満で自然妊娠を希望する場合には手術紹介を考慮するが、35 歳以上の場合には手術を勧めず数回の人工授精の後に ART に進んでいる。さらに、40 歳を過ぎた女性に対してはすぐに ART を勧めている。

現在不妊治療として広く行われ、子宮内膜症に対しても高い妊娠率を示す ART は、早期の妊娠成立のみならず、その後の子宮内膜症の改善にもつながることが期待できる。